

三十一 病氣と田中数義さん

昭和九年五月十六日、私は胆嚢炎にかかったのです。二十三日、麴町病院に入院、一週間ぐらい病名がわからなかったのです。私が入院したことを知った各地の学校の学生その他から、毎日のように見舞状が来たり、神社やお寺のお守りを送って来たりしたものでした。

ある朝、院長先生が私の室に来られ、「今日は泣かされました」といわれたのです。それで「どういふわけでしょうか」とお尋ねすると、「今日、学生から手紙が来て、自分が身代わりになるから中根先生を助けて下さいと書いてあり、それを読んで泣かされた」といわれたのです。この手紙を出されたのは、当時の愛知県商業の学生田中数義さんでした。自分が身代わりになるから私を助けて下さいといつて院長先生に訴えられたその真情には私も泣かされたのです。田中さんは実に私の命の恩人です。田中さんは学生生活を終えられてから愛知県庁に勤められ、最後には教育次長になられた人です。愛知県といえば日本でも代表的な大きな県です。お辞めになつてからは現在、玉野総合コンサルタント会社に勤められ、名古屋西ロータリークラブの会員になつておられます。この間、西ロータリークラブで二度目の卓話をしたのですが、それは田中さんのご紹介でした。中根式速記協会の愛知県支部長をしていただいております、非常に力を入れていただいております。私の米寿や卒寿の祝いするときなど、教育委員会の主なる人々や、高等学